

kyoto basketball



ストリートバスケット、3on3（スリーオンスリー）の名称で、ファッション性の強いスポーツとして生まれた3人制のバスケットボール。2007年に、国際バスケットボール連盟（FIBA）が正式種目に採用し、現在は「3×3（スリーバイスリー）」ルールが確立した。3年後の東京五輪では、新しい正式種目の一つになる。

京都府バスケットボール協会では、すでに「3×3 特別部」をつくり、普及に取り組み始めた。同部の堤隆司部長（府立清明高校教諭）は「選手が個人技を思う存分発揮できる面白さがあり、だれもが思い通りにチームをつくって大会に出られる利点も」と、仲間づくりを呼びかける。

第3回3×3日本選手権の京都府予選を2016年12月に向日市民体育館で初めて開いた。向日市では先行して毎年、ストリートバスケット大会を開催しているが、その土台に京都府予選を兼ねた格好だった。試合は、オープン（年齢制限なし）に男子7チーム、女子2チームが、U-18（18歳以下）に男女とも3チームがそれぞれ出場した。女子のU-18で優勝した紫野高校バスケットボール部3年生チーム（パールガールズ）は日本選手権（2017年3月・東京開催）で3位になった。

それでも、京都には、常設の3×3コートや、固定メンバーで継続して活動するチームが「ほとんどない」という状況（堤部長）。そんな中、7月1日に、西京極総合運動公園に屋外バスケットゴール（2基）が完成し、除幕式と、記念のフリースローチャンピオン大会が開かれた。3×3にもつながるプレーが、いつでも、だれもが楽しめる場所に、と期待されている。

7月、西京極総合運動公園内に新設されたバスケットゴール



kyoto basketball

100年の伝統を誇る京都のバスケットボールに「新風」が吹き始めた。2020年の東京五輪で正式種目になる「3×3（スリーバイスリー）」の京都での取り組みが本格化。プロの新生Bリーグには、Tkbjリーグで活躍した京都ハンナリーズが継続加盟した。ジュニア選手の育成などにも意欲を見せる。京都のスポーツ活性化にとっても期待が大きいバスケットボールの“動き”を紹介する。

文＝スポーツライター 井上年央
写真提供：（公財）日本バスケットボール協会

京都バスケット 新時代の 幕開け

京都から世界へ 3×3 始動。

東京五輪を見据えて、3×3普及に取り組む日本バスケットボール協会では、「3×3ガイドブック」を作成し、国際大会、プレーの引き、ルール解説などを紹介している。また、第4回日本選手権の開催（U-18・2017年12月、オープン・2018年6月）を決定、府協会では前回に続いて予選会を開く。一層の普及には、大会開催やコートの確保など条件整備の課題もあるが、堤部長は「ファミリーでチームをつくってもいいですし、楽しみ方はいろいろあります」と前向きだ。



日本初の3×3国際審判 伊藤亮介さん

「3×3」国際審判の日本の第1号が、伊藤亮介さん（京都府職員）だ。Bリーグ審判でもあり、一方で、日本バスケットボール協会審判部「3×3分科会」担当として、東京五輪も含めた国内外の3×3審判部活動を統括する役割も担っている。

伊藤さんは香川県高松市の出身。高校時代はインターハイ・バスケット県予選決勝で敗れた思い出も。1992年に大学進学で京都へ。体育会ではなく、京都クラブリーグのチームで楽しんだ。「そのときに、審判をする機会があったので」と興味を持ち、国内最上級審判の「2A級（現S級）」の資格を取った。

「3×3」の国内トップ（プロ）リーグ「3x3.EXE」は2014年に誕生、伊藤さんは初年度から審判に。2016年5月には、マレーシアで国際審判テストに合格、日本人第1号になった。審判はプレー中の反則を見逃さず、公平に試合を進めるのが第一だが、Bリーグ、Jリーグなどプロスポーツでは、観客が楽しめる試合になるように、というのも大事。伊藤さんは「3×3は、その傾向が一層強いと思いますね。選手のプレーを注視しながら、背中で『観客が盛り上がっているか』を感じ取ることも必要です」と「試合の総合プロデューサー」を意識する。

東京五輪で「3×3」は日本の有望種目という見方もある。伊藤さんは五輪成功と同時に、「3×3」をもっと普及しようと、活動の幅を広げている。